異文化 本音で語ろう

大学のグローバル化で留学生が増える中、最近は交流イベントも盛んに開かれている。中でも注目されているのが、留学生らと生活や文化など、身近なことを本音で語り合う早稲田大（東京都新宿区）の「ホンネトークカフェ」だ。学生が互いの立場に配慮しながら建設的に議論するもので、「視野が広がる」などと好評だ。

早大生企画「カフェ」

ホンネトークカフェは、同大国際コミュニティセンター（ICC）が主催。学生スタッフ17人が企画と運営を担い、夏の合宿とキャンパス内で年に計2回開催している。11月に開かれた同カフェの参加者の内訳は、日本11人、中国19人、韓国1人。

初めにスタッフが議論のルールとして「異なる文化に敬意を払い、仲間の気持ちに配慮する」「一般論ではなく『私はこう考える』と自分の意見を言う」などと説明すると、学生は四つのグループに分かれ、「JAPAN」「CHINA」「KOREA」と書かれたホワイトボードの枠に、相手国に対する質問を日本語や英語で書き込んだ。

例えば、日本人学生は、中国の欄に「日本のキャラクターなどのパクリがなぜ多いのか」と記入。中国人学生は「コピーした方がコストが安い」と答えた。

一方、別の中国人学生は「日本」の欄に「いつも空気を読んでいて、ストレスを感じないか」と書いた。日本人学生が「雰囲気を乱されると、みんないらいらする風潮がある。でも、（空気を読むことが）嫌になることもある」と打ち明けた。

終了後、2年の寺井彩夏さん(20)は「自分の意見を言うことは大切だなと思いました」と話した。中国出身の早稲田大大学院生の陳博識さん(22)は「生の声が聞けるので面白い」。韓国出身の2年キム・ソルさん(23)は夏の合宿にも参加しており、「合宿の最終日は、領土・慰安婦問題をめぐり、どうしたら解決できるのか、とことん話し合いました」と述べた。

中韓学生と 立場に配慮「視野広がる」

一方、スタッフの国籍も日中韓、ベトナム、ブラジルなど国際色豊かだ。韓国系カナダ人で2年のエリック・ユンさん(21)は「トークカフェでは、普段は口にしにくい微妙な話題をテーマにするので、学生の視野が広がります」と説明。3年の田上栞（しおり）さん(21)は「学生は東アジアについて、ニュース程度の知識しかないこともある。話し合いをすることで、相手の国についてもっと勉強したくなり、成長できると思います」と意義を語った。

「お互い建設的に話し合いをすると『普通の若者なんだな』と実感し、相手国に対して抱いていた偏見もなくなる」と「ホンネトークカフェ」を楽しむ学生＝東京都新宿区の早稲田大

時事通信取材、静岡新聞朝刊掲載（2014年12月21日）